



鹿沼の自然・栃木の旅

月報第45号

(2016年7・8月)



ふるさとの山

想ひ出の路を辿りて／山の旅二日となりぬ

美はしき五月の旅は／青葉ゆく水の音にも／花の香はなよかにうごく

峠ゆき村を訪づれ／したしみの山路をゆけば

そのむかしあかず眺めし／ふるさとの山のかずかず／今更にうつくしかな

田部重治『詩と断章』より（右はカバー、詳細は4頁から）

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼

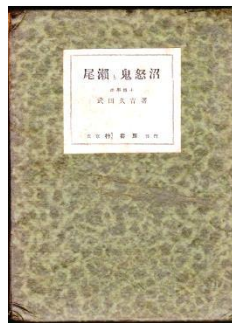


初秋の尾瀬ヶ原ハイキング

～ヒツジグサ、オゼコウホネ、ジュンサイ等、すいれん科の植物の観察～

地は尾瀬沼湿原のそれよりもはるかに、ゆるやかな緩傾斜を以て西にのびる。そして精密にこれを見る時、尚限り無き起伏がそのうちにあり、又小池が無数に点在している。而して湿原の所々、流に沿うて多くは樹林が帯状をなして発達している。植物群落はその地形と相俟って様々に変化する。

小池は形も大きさも色々であるが、概して大きいものではなく、中には固定的の浮島、並びに時としては遊動する浮島を、幾つか浮かしているものもある。これ等池中の植物は至って簡単で、ある所にはヒツジグサがあり、ある所にはジュンサイがあり、少し大きなものの中には逸品ネムロコウホネが生じている。



武田久吉著『尾瀬と尾瀬沼』(昭和5年8月10日、梓書房発行)より

武田久吉は植物学者で日本山岳会設立者のひとり。旧英国大使館別荘のニュースで名前の出てくる明治初期の外交官アーネスト・サトウ(『日本旅行案内』の著者の一人)の息子。

尾瀬戸倉に車を置いて、バスで鳩待峠へ。ここから川上川に沿って下り(標高差180m)、尾瀬ヶ原の西端、山ノ鼻へ。池塘に生えるヒツジグサ、オゼコウホネ(ネムロコウホネの変種)、ジュンサイ等、すいれん科の植物が楽しみです。尾瀬ヶ原の東端、見晴を目指しますが、池塘は尾瀬ヶ原の特に西側に多いので、竜宮小屋あたりまで行って同じ木道を戻りたいと思います。他にも秋の花が楽しめると思います。どうぞ奮ってご参加ください。

日 時：9月4日(日) AM4:00 北小西門集合

行 程：鹿沼(北小) 4:10——土沢 IC——清滝 IC(日光 FM)——中宮祠——金精峠——尾瀬戸倉①(バス)——鳩待峠……山ノ鼻小屋……竜宮小屋……(見晴)……竜宮小屋……山ノ鼻小屋……鳩待峠(バス)——尾瀬戸倉②——金精峠——中宮祠——清滝 IC——神橋——日光 IC——土沢 IC——鹿沼北小

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ
必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

1/25,000 地形図は「至仏山」「尾瀬ヶ原」「燧ヶ岳」

参加費：おとな 900 円、子ども 450 円（ガソリン代）

保険料（今年度分）1,300 円

問合せ＆申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



※ 7月31日～8月1日の男体山、8月21日の
会津駒ヶ岳の各登山は、悪天候のため中止といたしました。

次回予告

9月18日（日） 奥白根山

菅沼——弥陀ガ池——奥白根山——五色沼——弥陀ガ池——菅沼

詳細は追ってお知らせします。お楽しみに。

本号の内容

山行案内	初秋の尾瀬ヶ原ハイキング ～ヒツジグサ、オゼコウホネ、ジュンサイ等、すいれん科の植物の観察～	2
次回予告	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
表紙の本	田部重治著『詩と断章』	4
活動報告・1	鹿沼学舎主催・新緑の栗野ハイキング	11
活動報告・2	続・新緑の夕日岳ハイキング	15
活動報告・3	日光・中禅寺湖南岸、巨樹探訪の会	17
活動報告・4	尾瀬国立公園・田代山ハイキング	21
活動報告・5	女峰山ハイキング	24
山口さんの自然講座	きのこ再び（中編）・ヒガンバナの考察	28
愛書家のひとりごと	芸術たらしめる文章	31
あとがき	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	38
おしらせ	自然観察クラブ 2016 年度会員名簿	38
山書談話室	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	40

田部重治著『詩と断章』

(昭和17年11月20日・七丈書院発行)

ふるさとの山

想ひ出の路を辿りて
山の旅二日となりぬ
美はしき五月の旅は
青葉ゆく水の音にも
花の香はなやかにうごく

峠ゆき村を訪づれ
したしみの山路をゆけば
そのむかしあかず眺めし
ふるさとの山のかずかず
今更にうつくしかな

目をうつす彼方の山の
雲を抜く雪のいただき
うれしさに姿あをぎて
いくたびか叫びあげけむ
気高きはふるさとの山

ふるさとの山路を行けば
ひとくきの花の色にも
わが胸の血汐はをどる
その頃をなつかしみつつ
われしばし涙にぬれぬ



ふるさとの想ひ出

ふるさとの野邊を想へば
笛の音におぼろ月夜を
そことなくさ迷ひ行きし
その頃のしのばるるかな

母ゆきし青葉のころに
白つつじさくおくつきを
訪づれて涙にくれし
その頃を想へば遠し

さみだれの悲しき空に
おくつきにわれ送りしは
うらわかき乙女なりけり
その頃も若き日なりき

ふるさとの野路を歩けば
目にうつる山も草木も
ありし日の姿のままに
村が家も昔に似たり

遙かにも東を見れば
國境の山まだ白く
緑葉は杜にけぶりて
ゆかりの人は土に眠れり

乙女の墓

われいまはたちの頃の
むかしをば想ひわづらふ
あはれ そは さみだれのふる
今日のごと悲し日なりき

なが母はなを忘れそと
悲しみにおせびて泣きぬ
あはれ そは ひつぎ送り
さみだれのふる日なりけり

はてしなく想ひつづけて
わがいのちいま傾きぬ
その頃に想ひをやれば
ひとの世は水泡に似たり

なが姿むかしのままに
かはりなき星の如くに
わが胸の心のやみを
輝かす光となりぬ

武蔵野に墓をしつらひ
なが形見そこに埋めて
なが日頃かくもめでにし
ひともとの萩を植ゑたり

なが^{さだめ}運命なげきし母も
なが日頃おつびし妹も
つぎつぎにこの世を去りて
ながわきにしづにねわれり

ああ かくて 母子三人は
ありし日のままに伏したり
ねがはくは乙女の魂よ
とことばに安らけくあれ

畠

もんぺい穿いた乙女二人が
いそいそ茄子の蟲とつてあた
私がわきに立つてそやすと
『できたら今にもつて行きませう
をちさん 何を作つてゐるの』

『茄子は少々むつかしすぎる
僕はとまとにいんげんばかり
できたらやがて下げて行きませう』
七月になり忘れてあたが
茄子を七八つとどけて呉れた

可愛い子たちは忘れずにあた
代りにこれをさげて行かうと
とまとにいんげん包んでゆくと
『をちさん 旨いね 書物よおのが
仕事とばかり思つてあたのに』

去年のことを想ひ起して
ことしはとまとといんげんのほか
さといも つるなも一緒に植ゑた
また あの子たちにほめられよう



※ 編集の都合で詩についても原文の縦書きを横書きに改めましたが、旧字旧仮名遣いはほぼ忠実に再現しました。その関係で本文も今回は概ね旧字旧仮名遣いです。

北國の女性

十年目に昨年の暮と更に新年になつてからと合せて二度、郷里に歸つた。初めには重態にある妹を見舞ひ、次にはその死を弔はんがためだつた。そして久し振りに郷里の姉や妹たち、姪たちに會つて、しみじみと話した。

^{がいがい}皚々として三尺ほど積り、その上にもふりしきる雪を眺めつつ、炬燵を中心として亡くなつた妹のことを話したり、また、新しき時代、大東亜戦争のことなどを語りあつたりした。そしてつくづく感じたことがある。

男の人たちは多くは東京で學んでゐるので、度々、顔を合はせる機会はあるが、女たちには滅多に會ふことがなく、僅かに幼少の頃を知るだけである。いろいろ話をして彼らの意見をきいて見ると、十年以前の北國の女性とは天地の差があるほどに大きな變化が、彼らの思想にもたらされてゐるのに驚いた。

六十代や七十代の女の人にも變化はあるが、それよりも二十代、三十代の女たち、特に新しい書物を讀み、雑誌を讀んでゐる女たちに多大の變化のあることが認められた。

この變化は、北國の傳統的な考へが、時代の風潮につれて、最もいい風に、誰が考へても、さういふ風にならなければならないといふ方向へ、じりじり動いてゐることだつた。例へば結婚問題にしても人間本位になり、それでゐて、どこか宗教的で、忍従的で、如何にも頼母しい考へをもつてゐるといふ感じがした。

彼らを東京あたりの教育ある女性と比較すると、東京の女はイブセンの目覺めた女のやうな感じを與ふるとすれば、彼らはロシアの作品に現はれたやうな優しい敬虔的な女性のやうな感じがした。

教養をもちながらも、素朴的な統一相を失はない女性、斯うしたものが北國の女性に於て見出される。それは由来、詩人が最も愛し、天才の愛するものであった。

雪に包まれた北國のわびしい冬のしめやかな二日を、私は斯うした女性達と共に語り合ふことにこよなき快感を覺えた。



日本人と旅

昔の日本人の旅は獨得なものだつたと思ふ。旅は色々に變化してゐるが、徳川時代から明治へかけて、未だ汽車の出来ぬ頃の旅は趣きが多かつたらしい。奥羽へ行く人は千住まで、東海道へ行く人は品川まで、甲州街道を行く人は新宿まで見送つて貰ふのが昔からの習慣らしく、そこで別れの宴をやるのも普通の習はしだつたことが、多くの旅行記に出てゐる。傳統を重んずる日本人は、今でも出發の驛まで見送りしなければ氣がすまないのはそこから來てゐる。

幾年かに一度、京都へ行くとか、善光寺へ御詣りするとかいふことは、佛教國の私の郷里の越中の習慣で、農夫はそのためにかせぎ働いた。その旅は永いもので、幾十日かかる大がかりなものだつた。そしてその旅の話をききたさに村の者がよつてたかつて來るといふ有様だつた。

さうして、旅をしてゐる内に、自然にも興味をもつた。海邊をたどり、船にのり、峠をよち、溪谷をあるくことが、日本の地勢から見て、旅にさまざまな變化を與へ、多少、冒險的な氣持をも與へた。斯うした旅で色々變つたものを食べた話や歩いた地方の言葉が違つてゐたことなどが、あろりのめぐりの話題となり、私達はそれに耳を傾けた。交通不便な時代にはさうした特性がそれぞれ地方にあつたことも十分に察せられる。

従つて旅行記は讀む人にとつても書く人にとつても面白いものであつたに相違ない。山により細かく區切られた日本國土は、そんなにも變化があつたのである。それは紀行文でもあり、風俗誌でもあり、小説的でもあり、色々なものであり得た。「道中膝栗毛」が一種の小説のやうで、それでゐて旅行記の形式を取つてゐることに、當時の人心に旅と言ふものがどのくらい食ひ入つてゐたかが分り、過去の日本文學に旅の叙述の多いことも、それにより解釋が出來ると思ふ。



ワーズワースの一つの詩

私はワーズワースの詩が好きである。抒情詩として幾度よんでも飽きないものがこの詩人の作に最も多い。その中でも最も好きなものの一つに『西の方へ歩く』(*Stepping Westward*)がある。

この詩は彼の詩の中で特に優れてゐるものの内に数へられてはゐない。それにも拘らず、私には一種不思議な力をもつて迫るものがある。

ワーズワースはこの詩の初めに次のやうに書いてゐる。

『私の仲間と私とが或る日没後の晴れた夕べ、数週間前に私達の旅の間に親切にもてなして呉れた小屋へ行く道すがら、ケタリン湖の畔を歩いてゐる時、私達はその寂しい地方の最も寂しいところで、二人のよい身なりをした婦人に遇つた。その一人は會釋のつもりで「まあ、西の方へ御出でになるのですね」と言つた。』

茲に原詩と、その大意を明らかにするための拙譯とを掲げよう。

"What, you are stepping westward?"—"Yea"

—"T would be a *wildish* destiny

If we, who thus together roam

In a strange Land, and far from heme,

Were in this place the guests of Chance:

Yet who would stop, or fear to advance.

Though home or shelter he had none,

With such a sky to lead him on?

The dewy ground was dark and cold;

Behind, all gloomy to behind;

And stepping westward seemed to be

A kind of *heavenly* destiny:

I liked the greeting; 't was a sound



Of something without place or bound;
And seemed to give me spiritual right
To travel through that region bright.

The voice was soft, and she who spoke
Was walking by her native lake:
The salutation had to me
The very sound of courtesy:
Its power was felt; and while my eye
Was fixed upon the glowing Sky,
The echo of the voice enwrought
A human sweetness with the thought
Of travelling through the world that lay
Before me in my endless way.

『まあ、西の方へ御歩きになるのですね』『さうです』
このやうに故郷から離れて遠い異國に
もろともにさ迷つてゐる私達が
この土地で「偶然」に弄ばれた御客であるなら
それは聊かすさまじい運命であらう
しかし美はしい空に導びかれては
家がなからうと雨宿りがなからうと
誰が止まらう 誰がすすむことを恐れよう

露けき地は暗く且つ冷たく
見かへるうしろはいづこも暗い
西の方へと歩いて行くことが
聖なる運命のやうに思はれた
私はこのあいさつを喜んだ
それは場所や境を超えたものの響
そしてその輝かしい地方を通つて旅する



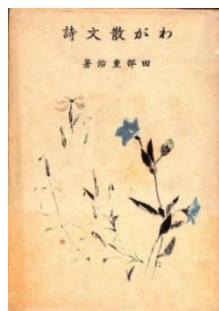
靈的な權利を私に與ふるやうに見えた

その聲はもの柔らかく且つ
話す彼女は故郷の湖畔を歩いてみた
このあいさつは私にとって
禮儀そのもののやうな響きをもつてみた
私はその力を感じた
私の眼が輝やく空をみつめた時
この聲のただよはす反響が
私の前に涯てしなく横はる
世界を通じて旅する思ひに
人間的な美はしさを加へた



この詩をよむと美はしい落日に向つて行く詩人や彼に話かけた婦人の姿が彷彿としてうかび、場所を超越したこの大きな問ひとそれに對する答へとが、静かな夕暮の湖畔の空氣によつて反響され、それが行間にひびくやうな氣がする。その響きは人間であり自然であり、自然であり且つ人間であつた。

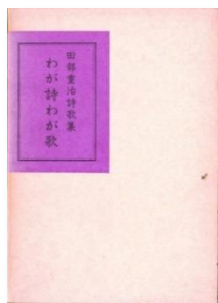
矢張り大自然の間に彷徨した詩人の捉へるものが大きいといふ氣がする。



『わが散文詩』
(昭和 17 年 7 月 30 日)
第一書房



『わが散文詩』
(昭和 18 年 12 月 18 日)
朱雀書林



『田部重治詩歌集
わが詩わが歌』
(昭和 49 年 6 月 30 日)

鹿沼学舎主催・新緑の栗野ハイキング
～口栗野の自然・巨樹・史跡を訪ねて～
5月29日（日） 天気・はれ

《案 内》

日 時：5月29日（日）AM8:30 鹿沼市役所駐車場集合

または 9:00 口栗野城山公園駐車場集合（PM1:00 解散予定）

持ち物：リュックサック、水筒、雨具

行 程：城山公園（栗野城）……光明寺……清滝寺……叶台……雲叟寺……笠場……

旧栗野高校……口栗野神社……妙見寺……城山公園

見どころ：

城山公園→ツツジの名所として知られる城山公園は栗野城跡です。栗野古記録には「栗野古城は足利又太郎忠綱の出張である。」と書かれています。また一説に「築城は延元3年（1338年）、城主は足利尊氏に従っていた平野将監範久」と伝えられます。その後、皆川氏、北条氏、佐野氏など諸將の攻防の地ともなり、さらには豊臣秀吉の北条攻めによって天正18年（1590年）に落城し、歴史を閉じました。

光明寺→サルスベリ（目通り1.32m）

叶台（清滝寺）→カヤ（目通り5.7m）／エドヒガン（目通り3.6m）

雲叟寺→梅園、旧栗野高校→カヤ（目通り5.5m）、栗野神社→ヒノキ（目通り3.5m）

妙見寺→イチヨウ（目通り2.26m）／エドヒガン（目通り3.5m）／ムクロジ（目通り1.8m）

《報 告》 新たに鹿沼市に加わった栗野の、まずはその中心市街地である口栗野の歴史や史跡、自然を知るべく、街あるきをしました。城山公園は大正14年、かつて城代をつとめた神山氏の子孫が6ヘクタールの城跡を街に寄贈して整備が始まったものです。一番奥の駐車場の近くには芭蕉の「夏草やつわものどもが夢の跡」の句碑、忠魂碑、また横尾家の墓所があります。初代栗野町長を務めた横尾勝右衛門（智孝）は自らも書を好み、勝海舟や日下部鳴鶴らの文化人と交流を深め、明治22年2月、二人を自宅に招き、祖父勝右衛門（宜智）墓碑の揮毫を依頼しました。墓所正面の「友山翁」墓碑は海舟、碑文は鳴鶴の手によるものです。

また栗野城跡の保全にも尽力し、園内に建てられた「城山梅園之記」、山頂の「城山」碑は、徳川慶喜の揮毫によるものです。



ちょっとした山登り
眼下に栗野の街が

城山は思いの外、急峻な山で、なるほど山城を構えるには敵の侵入を防ぐという意味で有利であったものと思われます。山頂には「城山」の立派な石塔が立っています。また大きなコンクリート製の土管を縦に埋めたものがありました。外周直径4.3m・内周直径2.6mとあり、実際は喇叭（ラッパ）型円筒形、すなわちすり鉢形になっており、下方からの雑音を防いでいた通信施設を備えた「防空監視哨」です。1941（昭和16）年「防空監視隊令」の発令を受けて整備・建造されました・ウラジオストクから飛来し、中禅寺湖で南下、東京爆撃へ向かうソ連軍用機を想定した施設でした。実際には東京や宇都宮を爆撃したアメリカの軍用機B29の監視を行っていました。



戦争の記憶の遺産
「口栗野防空監視哨」



↑清滝寺の如意輪観音
↓雲叟寺の如意輪観音置き場？



城山公園から下りた道路の下に新しい十九夜塔3基を発見。そこはちょうど広い駐車場を備えた公民館の裏手にあたり、現在も十九夜信仰が続いているものと思われる。

追手門の奥手に赤い屋根のお堂があり、中国の故事を描いたと思われる見事な彫刻が見られました。

清滝寺の門前では十九夜塔と庚申塔、そして1基の如意輪観音が見られました。

思川を対岸へ渡り、雲叟寺へ。思川右岸に付けられた道を下流に進むと、崖の下に1基のお地蔵さんと9基ほどの如意輪観音がありました。置き場所がなくなってここに集められたと思われますが、清滝寺にあった1基以外、他の場所では見られなかった如意輪観音が、ここにだけたくさんあるのは不思議です。十九夜塔と関係があるものと思われます。

県道に出て橋を渡り、左岸に戻りました。カヤの木を探しながら口栗野神社を目指しましたがそれらしい高木は見つからず、近所の人に尋ねました。栗野のカヤは健在でした。しかし太さ5mというのは周囲5mの誤りではないかと思われます。高さはないものの周囲に十分な土地と空間を確保され、小社が祀られており、地元の方々に守られていることがうかがえます。清滝寺のカヤは、本堂から離れた山手の墓地の方にある、という情報も得ました。



♪大きなカヤの木の下で♪

旧栗野高校の東側に口栗野神社がありました。口栗野神社は旧村社。主祭神は武甕槌命、由緒沿革によると「明治5年鹿嶋大神宮を日光神宮へ合併、口栗野神社と改む、神殿は旧日光新宮の神殿なり、延長年間（平安中期）の創立なりという、再建年間不詳」。



口栗野神社

いったん主要道に戻って西に進み、栗野川に突き当たります。上流に向かって県道を進むと妙見寺入口があり、ちょうど2台のバスが出てきました。今日の史跡探訪の会では本寺の境内を見学させていただきたい、とお願いしておきましたが、境内に入ることは構わないが、この日の午前中は法事があり、残念ながら住職は対応できない、とのことでした。ところが、我々の歩みが遅く、予定時刻を大幅に過ぎてしまって法事が終了したものであると思います。栗野川に架けられた妙見寺橋を渡ると、正面に山門があります。静かな山懐にある山寺です。階段を登って山門をくぐり、立派な本堂に沿って、歩いては申しわけないと思われるほど細やかに手入れされた美しい庭園を進むと、玄関先に住職と母上が迎えに出ておられました。境内にあるムクロジ、カリン（とても大きな）、シダレアカシデ（最初は横根山で発見された樹木）など教えていただき、本堂の中もご覧ください、とのこと。棚からぼた餅。



妙見寺本堂
歓待された

妙見寺は元は荒廃した他宗の寺でしたが、天正2(1574)年、独峯和尚によって再建されました。享保5(1720)年、本堂を焼失しました。現在の本堂はその後（江戸中期）に建てられたものです。境内開山塔の上り口、右側に「独峯水」があり、四時絶ゆることなき泉と伝えられています。

元々の玄関は建物の東端、山門を入ってすぐの所。広い土間にはかまどもあり、古民家そのものの造りです。本堂の正面には本尊の木造釈迦牟尼如来座像が安置されています。黄金色のシャンデリアのような天蓋は部品のひとつひとつに金箔を施した逸品です。



お茶をいただいたあと、母上に「独峯水」を案内していただきました。来春、サクラの咲く頃、また伺いたいとお願いして、医王山妙見寺をあとにしました。

口栗野の市街地に戻り、栗野川の橋のたもとに子安地藏尊というお堂を見つけました。畳敷きで7～8人入れそうなお堂です。前庭にいくつかの石碑があり、そのうちの

いくつかは十九夜塔です。向かいのお宅で尋ねたところ、現在でも毎月きまった日に、「十九夜様」を行っている、とのことでした。

無事、城山公園に戻り、帰路につきました。

✿ 参加者

鹿沼学会会員 7 名、阿部良司（計 8 名）

✿ 見た植物

（針葉樹）カヤ（旧粟野高校近く、右写真）、

（落葉樹）ムクロジ（妙見寺）、ウメ（雲叟寺）、ウツギ、エノキ（思川）、

（草の花）オカタツナミソウ（城山）、マツカゼソウ、ヤブミョウガ、

ユキノシタ（城山公園、右写真）

✿ 見た・聞こえた鳥

キビタキ（城山公園）、アオサギ（思川）

✿ 参加者からいただいたおたより



「～口 粟野の自然・巨樹・史跡を訪ねて～」との事でしたので、歴史は苦手ですが、自然の草花や巨樹に興味があり、初めて参加させて頂きました。

孫を連れて遊んでいた城山公園が、粟野城跡で…成り立ちや現在の頂上の様子も登って初めて知る事が出来ました。

樹齢 1100 年の旧粟野高校脇のカヤの巨木に圧倒され、十九夜塔、如意輪観音像が地区に点在していた事、現在も風習が伝わっている事など興味深く見学出来ました。

妙見寺では住職のお話、お母様の接待も思いがけなく、嬉しかったです。

爽やかな五月の風を受け、川沿いを歩き、竹の子も失敬し、有意義な時間を過ごす事が出来ました。ありがとうございました。

途中たくさんの草花の名前を教えてくださいました。インターネットで再確認します。

（吉成和子）

続・新緑の夕日岳ハイキング
～再び鹿沼の最高地点（1526m）をめざして～
6月5日（日） 天気・くもり

5月15日から3週間おいて今季2度目の夕日岳は、季節が進んで咲く花もだいぶ変わり、山の上の方までヤマツツジが満開、クリンソウは案の定人知れず咲き盛っていました。参加者の顔ぶれも入れ替わって今回はおじさん中心のグループに、ケーブルテレビの取材も同行。細尾峠からの合流点から上は今回も大勢の登山者で賑わっていて、よく声を掛けられました。我らが街鹿沼にこんな豊かな自然があったんだ、という新たな感動を、後日どのように番組で伝えてくれるのか楽しみです（その後“鹿沼トピックス”の中でさらりと紹介していました）。



夕日岳山頂にて
あいにくの展望でしたが…

✽ 参加者

半田創宇・光晴、小川真司、大塚 勝、川津 聡、渡邊良太（鹿沼 CATV）、
阿部良司・みゆき（計8名）

✽ 咲いていた花

（木の花）クマイチゴ、サラサドウダン、ヒメウツギ、ミヤマザクラ、
モミジイチゴ、ヤブデマリ、ヤマツツジ

（草の花）ウスバサイシン、ギンリョウソウ、クリンソウ、ショウキラン、
フタリシズカ、ミヤマナルコユリ

✽ 見た・聞こえた鳥

ジュウイチ、ツツドリ、ホトトギス



夕日岳の手前、地藏岳に登る途中の溪流沿いに忽然とクリンソウの群落が現われた

✿ 夕日岳・初夏の花図鑑



フタリシズカ



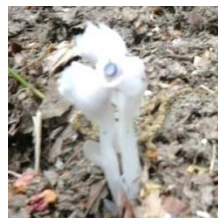
ミヤマナルコユリ



クマイチゴ



クリンソウ



ギンリョウソウ



ヤマツツジ



サラサドウダン



ミヤマザクラ



ヒメウツギ



ショウキラン



ヤブデマリ

✿ 男たちの山路点描



↑クリンソウに群がるカメラマン
ケーブルテレビの取材中→
↓ヤマツツジの斜面を登っていく



途中、ハガタデ平でのひと休み↑



→
← 地蔵岳山頂付近の小祠
地蔵岳山頂にて



日光・中禅寺湖南岸、巨樹探訪の会

6月12日（日） 天気・くもり

早朝の出発で低公害バスの第1便に乗って千手ヶ浜へ。人の手で植えられた色とりどりのクリンソウを楽しむ人々の傍らを過ぎて、千手堂の跡地（今秋再興される予定）からいよいよ「中禅寺湖周回線歩道」に入ります。

鬱蒼たる原生林に覆われた湖畔に沿って道は登り下りを繰り返し、時に沖合に上野島や八丁出島、対岸の男体山などを見晴らしながら、様々の植物を観察しながら（意外に植物相が単調なのは、シカの被害のせいかも）、クマの出没注意の看板が所々にあったものの幸いに出くわすことなく、中宮祠まで数時間の徒歩行を楽しみました。



参加者

佐々木伸二、稲葉幸枝、西山弓子、渡辺加代、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計8名）

見た植物

（落葉樹）イワガラミ、オオヤマザクラ（実）、オノオレカンバ（幹）、キバナウツギ、ドロノキ、ニシキウツギ、ハルニレ、ヒロハカツラ、ミツバウルシ

（木の花）オオバアサガラ、サワフタギ、シウリザクラ、ナツグミ、ナナカマド、ニシキウツギ、ミヤママタタビ

（草の花）イフセントウソウ、ウスバサイシン、オオヤマフスマ、カラマツソウ、ギンリョウソウ（写真㉔）、クリンソウ（写真㉕）、ニリンソウ、マイヅルソウ、ヤブレガサ



見た・聞こえた鳥

オシドリ、カワウ、メボソムシクイ



※ 参加者からいただいたおたより

中禅寺湖南岸ハイキング

中禅寺湖畔を久しぶりに歩きました。クリン草の咲く千手が浜より緑美しい原生林を湖に沿って7時間…今まで足を痛める事はなかったのですが痛みが走って(右足)苦勞致しました。皆様にも気を使わしてしまって申し訳ございません。お世話になりました事感謝致します。大日崎辺りにあるシャクナゲの大群落は花が終わってしまっていました。倒木が多く人の手の入っていない事がわかります。大木がねじれ曲って立っている姿は圧巻でした。真向いに男体山を仰ぎ、藍深き湖の色に心奪われ、二羽の鴛鴦にいやされて、心から自然と対話ができたとようなハイキングでした。

日光はやはり素晴らしい美しいです。又、私のいけるような所がありましたら御一緒させて戴きたく思います。

夕闇せまる歌が浜駐車場で作りました。

歳月は止る事なく雲の峰

太公望暮色蒼然夏の湖

又、豆博士にはいろいろと教えて戴き感心したりおもしろかったりで楽しかったです。

(渡辺加代)



中禅寺南岸ハイキング

日光市立東中学校2年 佐々木伸二

いつものように夜寝つけず、いつものように寝坊をし、いつものようにぎりぎりでお家を出た。「いつものように」が続いたが清滝のファミマで阿部本隊と合流し、いざ奥日光へ。

今日は中高年の方々を中心とした計8人のグループで中禅寺湖の南岸を千手ヶ浜から立木観音、中禅寺温泉まで歩くコース。アップダウンのないかわり全長12,3kmの長いコース。それでも1周約25kmの半分ほどだ。本当なら4時間ほどで行けるはずだが。

まず車でいろは坂を上り中禅寺温泉の駐車場で作戦会議。始発バスまで約40分あるので、低公害バスの出る赤沼へと向かって2台の車のうち1台を走らせた。わりやり8人つめこんで…。(車の定員は7人:編集部注)

赤沼からの早朝運行バスをあてにしていたが、なく、次の



千手ヶ浜行バスを待つ
赤沼バス停早朝の賑わい

(次ページへ続く)

バスは90分後。(赤沼に着いた時刻は7時頃)ヒマでしかたない。スケッチブックでもあれば絵でもかいていたのに…。

30分ほどして少し早めにバスが入ってきた。早く出発するかと思いきや、そのまま20分も待たされて定刻に出発した。千手ヶ浜には8時過ぎに着いた。人工的に作ったグリンソウの群生地へ。2回も来るところではないな、と5分も見ないうちに分かった。そしてこのおじさんが少々うるさい。クマすずはしまえ、とか何とか…。阿部さんはイヤになったのか2分ぐらいしてすぐに出ていってしまった。おじさんいわくこのへんのクマはイイ女しかおそわないようだ。フーン、じゃあ今日は安心だな、だって…イヤ気をつけねばならん。何しろこの隊にはイイ女がいっぱいいるからなあ(今日は安心だな、は忘れてください)。それとあのおじさん、あそこの小屋が火事になったときまきこまれて1ヶ月くらい意識不明だったらしい。うーむ、この人はうちのとなりに住んでいる、男体山で雷にうたれて生還した人とともに「日光のレジェンド」なんだろうなあ、うんうん…。

しばらく先で阿部隊長と合流。あの人は自分の庭を自慢したいだけだ、とぶつぶつ言っている。そこからさらに行った小高い所に千手堂跡があった。これはもうすぐ再建されることになっている。その先にはジャクナゲの大群落。花の時期はきれいだろう。

湖畔は砂浜が続いているのかと思っていたが意外とアップダウンが大きかった。少しずつしか進まない。変な鳴き声がすると思うとカワウのつがいがいいた。

さらに進んだ所の砂浜を見て「なんかシカミたいなあしあとがいっぱいあるね」と話しつつ双眼鏡を少し下に動かして思わずゾクゾクとした。人の手を大きくしたようなあとが残っていた。短い指が3本くらいあるのが分かる。ひょっとしてあれは…。あとはご想像におまかせします。けっこう新しそうですね。

松ヶ崎の手前あたりにある砂浜で昼食。荷物が軽くなって出発。30分くらいしてみんなのペースが急にアップした。これは焼きソーセージととん汁パワーか？

しばらく行くと松ヶ崎。この先大日崎、上野島、阿世潟、八丁出島、イタリア大使館、とほぼ等間隔で続いている。このあたりに来て8人が4つの班に分かれ始めていた。先を行く2つが歩きがおそい人たちでうしろ2つが速い人たちだ。僕は前から2つめでゆっくり歩いている西山さんのうしろについていた。前2つが休憩を早めに切り上げ先に行くとうしろ2つが1～3分ほどおくれで出発する。そうすると自然に距離が縮み10分ほどすると2つめと3つめは合体するのだ。先頭は2つめより20mほど前を歩き、うしろは3つめより50mほどあとに行く。そんな感じでうまく回っていた。オシドリ



千手堂跡
秋には再興予定

なんかを見つつ行くと阿世潟。ここを過ぎるとグループがくずれて僕は先頭のところになった。八丁出島を過ぎ、狸窪^{むじなくぼ}を通ると日がかたむき始めた。もうすぐ夏至とはいえ気は抜けない。

4時半頃にイタリア大使館の公園へ。このあたりでグループは3、4つになっていた。ここを出て歩くと閑園間近のイタリア大使館なんかを見て4時50分頃歌ヶ浜に着いた。ここで運転手2人は赤沼と中禅寺温泉に止めた車をとりに行った。

2人がもどけるとみな分乗して下へと下りました。僕はつかれたときにいろは坂などやられたものだから気持ち悪くなってしまった。いつものことだけど…。

さて今回は半周に8時間以上かかったが本当は1周が8時間なのだ。倍かかっているのは少しばかりなめてたからだだろう。湖なので平らだと思いこんでました。行きもしないのに「これなら大丈夫」と思ったりするのはやめないと、思いました。

平成28年6月12日

※ 以前に投稿しました高尾山の紀行文の中で「タキ」と書いた所は「チキ」のまちがいでした。チキはレール運搬車です。たいしたことではありませんが訂正します。



↖湖畔沿いの道は意外と起伏がある
中禅寺湖南岸からの男体山の眺め↑
大日崎の大日如来像↗



←南岸から見る上野島（上は拡大写真）
歩いて渡れそう…



↓阿世潟、八丁出島回りから
比較的平坦な道、静かな散策路



↓歌が浜駐車場の辺り
前方に温泉街の賑わいも見え、
人里に還って来た気分



尾瀬国立公園・田代山ハイキング

7月10日（日） 天気・はれ

尾瀬に向かう道を途中でそれて山に入り、心細い林道ドライブの果てに、意外や広範囲の県外ナンバーを散見する大駐車場がありました。ここに車を止め、身支度して、尾瀬のように入山者数をカウントしている関門を通り、登山道に入ります。

端から青色が目にも鮮やかなエゾアジサイの歓迎を受け、その後も高山らしい花々に次々出会いながら登ること2時間、森林が切れて一面の草原の「小田代」に到着、木道の上から花盛りを楽しむながらさらに1時間ほど進んで山頂の田代山湿原に着きました。木道を辿って行って湿原最奥の「弘法大師堂」周辺の木陰で大勢の登山客に交じって昼食、尾瀬方面を含め四囲の山も見渡せる爽快な山頂の空間に名残を惜しみながら、下り始めます。

ひと休みしてから帰りのドライブに。林道があまりにデコボコなので、舗装された道に入ると、車がまるで路面を滑っているように感じました。行きに目をつけていた沿道の豆腐屋で土産を買い、会津田島のラーメン屋でちょっと早めの夕食、地元の人との会話も楽しみました。

緑豊かな山林や田園風景の中、河原はどこも荒れていて、この辺も昨秋の大雨で甚大な被害を受けたことが窺えました（流された橋もあったそうです）。



山上の花園、田代山湿原

※ 参加者

西山弓子、阿部良司・みゆき（計3名）

※ 見た植物

（落葉樹）アカミノイヌツゲ（※）、アズマシャクナゲ（※）、イワナシ（実）、ウラジロカンバ、ウラジロヨウラク（※）、エゾアジサイ（※）、オニシモツケ（※）、カツラ、クロモジ、サワグルミ、シウリザクラ（実）、シナノキ、ダケカンバ、ツルアジサイ（※）、ツルアリドオシ（実）、ナナカマド、ヒメシャクナゲ（※）、ブナ、ミツバウルシ、ヤハズハンノキ、リョウブ、



(落葉樹・カエデの仲間) アサノハカエデ、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、
オオイタヤメイゲツ、オガラバナ、テツカエデ、

(草の花・山道) アカショウマ、イワオトギリ、オオバノヨツバムグラ、
ギンリョウソウ、ゴゼンタチバナ(右写真)、コバノイチヤクソウ、ズダヤクシュ、
ツクバネソウ、フキ、マイヅルソウ、ミヤマエンレイソウ、ヤグルマソウ、

(草の花・湿原) キンコウカ、サワラン、タデヤマリンドウ、
チングルマ(実)、トキソウ、ニッコウキスゲ、
モウセンゴケ、ワタスゲ(実)、
(草の葉) コウモリソウ、シシガシラ、ショウジョウバカマ



✽ 見た・聞こえた鳥

ウグイス、オオルリ、キビタキ、コマドリ、センダイムシクイ、
ミソサザイ、メボソムシクイ

✽ 田代山植物図鑑



オニシモツケ



コウモリソウ(葉)



オオバノヨツバムグラ



ショウジョウバカマ(葉)



ツクバネソウ



シウリザクラ(実)



ツルアリドオシ(実)



コバノイチヤクソウ



✿ 参加者からいただいたおたより

田代山

7月10日。快晴。

阿部夫妻と3人で田代山をめざした。

登山口の標識に「登山2時間」と記してあったが、3時間ほどかかった。つぎつぎと高山植物が目白押しで、とても覚えられないので可愛い名前の「トンボ草」をしっかりと目に刻むことにした。小田代湿原から30分ほどでニッコウキスゲの群落に迎えられ頂上に到着。頂上は見渡す限り広い湿原で、周囲の山々が低く見えた。右廻りの一方通行で木道がずっと伸びている。赤とんぼの舞ってる中を歩き、ぜいたくにもゴゼンタチバナの群落を見ながら昼食をとった。

下山は、よくもこんな所を登ったと思うほどで、2時間ぐらいかかった。

今まで何回も見送ってきた田代山に登山出来てうれしい限りです。大変お世話になりありがとうございました。

(西山弓子)



タテヤマリンドウ



ヒカゲノカズラ



トキソウ



サワラン



モウセンゴケ (葉)



キンコウカ (右)



チングルマ (実)



ヤマサギソウ



女峰山ハイキング

7月24日(日) 天気・はれ

昨年の太郎山に続き、今年も“疑似親子3代”(13歳・58歳・77歳)でのちょっと高い山登り、女峰山に挑戦しました。
詳細は“孫”の佐々木くんの報告をご覧ください。



参加者

佐々木伸二、西山義信、阿部良司(計3名)



見た植物

(針葉樹) カラマツ、コメツガ、シラビソ、トウヒ、
ハリモミ(?), (常緑樹) アズマシャクナゲ、ガンコウラン、
(落葉樹) カツラ、サラサドウダン、ダケカンバ、ニシキウツギ、
ミネカエデ、ミネザクラ、ミヤマハンノキ、ヤハズハンノキ
(草の花) アカバナ(の仲間)、イワオトギリ、オノエラン、
キオン、クルマユリ、クロクモソウ、コバノイチヤクソウ、
コバノコゴメグサ、シラネニンジン、タカネニガナ、
テガタチドリ、トウヤクリンドウ、ネバリノギラン、ハンゴンソウ、
ミヤマタニタデ、ミヤマダイコンソウ、モミジカラマツ、ヤマハハコ、
(木の花) ノリウツギ、マルバシモツケ(写真A)、
(草の葉) イワカガミ、オオチドメ、ホソバイワベンケイ



見た・聞こえた鳥

ウグイス、ウソ、キジバト、コマドリ、ホトトギス、
ミソサザイ、メボソムシクイ、ルリビタキ



帝釈山(左)と女峰山



大真名子山



西山義信氏、77歳
女峰山頂から帝釈山へ
続く尾根を背景に

女峰山登山

日光市立東中学校 2 年・佐々木伸二

先月の中禅寺湖南岸ハイキング以来ひさしぶりの山だ。朝5時、清滝のファミリーマートで阿部さん、西山さんと落ちあう。今回は去年の太郎山と同じメンバーで3人の少人数登山になる。車でいろは坂を登り雲をつきぬけると雲海が広がっていた。山の上はいい天気だ。トンネルをぬけた先にはドーンと男体山がそびえている。戦場ヶ原はもやがかかかってとても幻想的な景色だった。今日はいいことありそう…と、思っていた矢先トラブルが発生した。登山口の志津へと続く林道がなんと途中で通行止めになっていたのである。道はクサリでふさがれていた。困ったことになった。ここから志津まで5.1キロ。登山口はさらに先だ。通行止めの原因は表向きは大雨による路肩の崩壊と路面の損傷と書いてあったが…。林道を5分も行くとうしろから次々と車が登ってくる。聞けばクサリは棒に巻いて針金で軽くしばっただけで簡単にとれる、とのこと。阿部さんは早速車をとりにもどり5分ほどで車をもってきた。しかし阿部さんの荷物の重いこと！西山さんと2人で運ぼうとして100メートルでリタイアした。本人はこれでも軽くした、っていうんだけど…。再び車中の人となる。先を行っていた登山者の方を1人のせてしばらく行くとさっきの車がまた列をなして入ってきた。しばらく行くと人のたくさんいるところに出た。志津乗越だ。男体登山のさっきの人を降ろしてわれわれはさらに奥へとすすむ。そしてゲートまできて分かったことがある。それは…クサリのとこの標識がまるっきりのウソだということ。どっこも路肩くずれちゃいねえじゃないかあ。どっこも路面こわれちゃいねえじゃないか!!! こんな堂々とウソを書いた看板は初めて見た。なぜウソを書くか。それは帰りに明らかになる。

ゲートの横に車を押し込んで出発。清滝へと続く林道が分かれると美しいダケカンバの森が広がった。その中をのんびり歩くとひらけた所に出た。目の前に女峰山が見える。そこには雲がかかっていた。僕は日光に住んでもうすぐ4年になる。そうすると天気の変わり目が大体分かる。朝、山に雲がかかるとその日の午後はたいいてくもる。この景色は天気の悪化を予想させていた。林道をはずれて谷へと下る。小さなハシゴで岩場へ下りそこをすぎると馬立についた。裏見の滝へと続く道が分かれています。尾根にそっていくと下の谷に巨大な砂防ダムが見えた。谷ぞいをしばらくのぼって行くと谷は細く低くなっていきやがて岩場になった。そこをこえて200メートルほど行くと水場があった。唐沢小屋まで10分くらいらしい。横に岩場を見つつ行っていると雲が上がってきた。予想通りになってきた。そのすきまからは砂防ダムが小さく見えた。



山頂近くのガレ場

水場から急坂を軽く10分オーバーして唐沢小屋についた。無人の小屋で2階建てみたいになっていた。フトンがあるのにはけっこうおどろいた。避難小屋の意味もあるのだろう。ここから山頂まで40分ぐらいいらいが…ウソだな。急な岩場を登るし、岩は手で押すと簡単に動く。おまけにところどころ割れている。危険そうだった。実のところ、滑落したのか分からないが追悼碑がたっていた。追悼碑にはこう記されていた。

「故鈴木啓之君(19才)この地に倒れ唐沢小屋にて永遠に眠る。

昭和51年6月5日

友よ眠れ 安らかに

明治大学ワンダーフォーゲル部

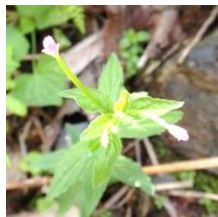
明治大学ワンダーフォーゲル部OB会」



山というのは命の危険と背中合わせなのである。ここを過ぎ小屋

から軽く1時間かかってやっと女峰山山頂2483メートルにつけた。これで僕は男体、女峰、太郎の日光三山を登った。あたりは雲の中でまわりの山は見えない。とりあえず昼食を食べる。(中略)この後は帝釈山、富士見峠を經由して行く予定でしたが同じルートをもどることに。下り始めるとあっというまに雲の中。木の影がうつりなんかもののけ姫に出てきそうな森になっていた。水場をすぎたら大したことはない。坂が、距離はかなりあった。その道はずーっとまっ白なきりの中。左手には砂防ダムが影になってそびえていておそろしさもあった。馬立をすぎ、林道を歩くと出発したゲートに戻ってきた。車で例の林道を下る。志津につく。にぎやかだった朝とちがいでない。ここを見て気づいた。ここには草が低くなっている駐車スペースがあった。しかし、そこはみな岩やら丸太やらでふさいである。車がとめられないようにしてあるのだ。なぜか。男体山は二荒山神社の境内になっている。中宮祠から行くと入山料として500円(登拝祭の間は1000円)をとっている。しかし、ここからだ和金をとれない。そして登山者の車が入ってイヤだった営林署あたりと組んで閉鎖したのだろう。しかし志津は男体、女峰、大真名子と3つの山の拠点である。行けないとなると困る。せめて千手ヶ浜みたいにバスを作ってもらいたいものだ。帰り、クサリを開けてふたびしめる。この件は少々腹が立ったのでクサリを三重にしばってきた。(中略)三本松で休んでから帰った。今回リュックに入れていたヘッドランプは使わずにすんだ。次の男体は本領発揮だろう。来月4、5と愛媛の石鎚山に山小屋泊で行く。(家族で)こんな後の山はどうなんだろう楽しみだ。営林署のイヤがらせがないことだけをねがいたい。

❁ 女峰山植物図鑑



アカバナ (の仲間)



ヤマハリコ



キオン



クルマユリ



ミヤマタニタデ



シラネニンジン



オオチドメ



クロクモソウ



イワカガミ



コバノコメグサ



ハンゴンソウ



コバノイチヤクソウ



モミジカラマツ



タカネニガナ



オノエラン



テガチドリ



トウヤクリンドウ



ガンコウラン



イワオトギリ

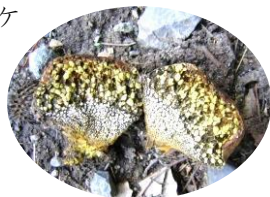


ミヤマダイコンソウ

きのこ再び（中編）

私がキノコに興味を持ったのは中学生のときで、チョウヤガの食草についても興味を持ち出した頃である。当時のキノコ図鑑は、保育社の『原色日本菌類図鑑』2冊と、北隆館の『牧野日本植物図鑑』に少し載っているくらいであった。とても中学生が買える価格ではない。きのこの本だけではなく、立ち読みしてはノートに書き写していた。この頃の本屋は、立ち読みするのは当たり前の時代であり、店員さんが「ボク、えらいね」と声をかけてくれたものだ。

そんなことなので、きのこの色までは正確に覚えていないので食用のノウケとコツブタケを間違えて食べたことがある。1970年代後半になると、きのこのカラー写真の図鑑がごろな価格で数多く出版されるようになった。食べたのは食毒不明のコツブタケだと知った。関西自然科学研究会でのキノコの観察会は1980年代に入ってからのものであり、理事（講師）は滋賀大学名誉教授・理学博士の本郷次雄先生であった。コツブタケを食べたと話すと、本郷先生は、コツブタケは麻酔作用があるのではという、ある医療機関からの調査依頼があることを話された。これにはゾッとしたものだが、眠くなることはなかった。煮汁が真っ黒で食欲をそそるものではなかったが、すごくおいしかったと話した。これは貴重な体験談ではあるが、後の本郷先生のキノコ図鑑にも、コツブタケが食用と書かれていない。



見るからにブキミな
コツブタケ

食べると命を落とす猛毒きのこでも、少しかじって味を調べる程度では中毒をおこさない。けれども絶対に口にしていけないキノコが2種類ある。1つはカエントケであり、汁がヒフについたままにしておくと、ひどいヒフ炎をおこす。テレビでカエントケを放送していたそうだが、私は見ていないが、出演した人が、そばを通っただけでも害があると言っていたそうだが、本当なのだろうか。



見るからに毒々しい
カエントケ

もう1つは、能本キノコ会でのことで、アイバシロハツに似たキノコを発見。ヒダはより密で青い。噛んで味をたしかめたところ、1時間くらいすると口内に薄紙を貼ったような

感覚になり、やがて甘味がわからなくなり下は発赤、腫大し
ビランを伴い話しづらくなった。口内炎の薬も効かなかった
が、数日後に回復したという。同会が本郷先生を招いての
観察会のときも、このキノコが採集された。本郷先生はのち
に、シビレンロハツと命名された。私は標本などを見せていた
だいたが、今のところ載っている図鑑はない。



これは食べられる
アイバシロハツ

きのこに限らず植物の同定のときも五感を働かせるのは大切なことだが、味覚だけ、ある程度の知識を得てからの方がよさそうだ。毎年、悲惨なキノコ中毒が報じられている。日本はキノコ好きな民族であるからだが、正しい知識がなく言い伝え(迷信)を信じているからである。例えば、キノコの茎がたてに裂けるものは、みんな食べられるというものがある。キノコの茎は細長い細胞がたてにならんでいるので、食・毒ほとんどのキノコの茎はたてに裂ける。また、虫が食った跡があるから食べられるのでは、と思っている人もいるし、色や形も当てにならない。1つひとつ、正確に覚えるしかない。キノコの毒成分は、味の良いものが多いのもくせものだ。

2010年10月4日、奥日光ハイキングのとき、食用のハナイグチがたくさん採れた。自然観察クラブの石崎さんは、食べるのもう一度見てという念の入れようだった。実のところ、これくらい慎重でなければならない。今は各地でキノコの観察会が開かれているので、積極的に参加するのが望ましい。



ハナイグチ (食用)

ヒガンバナの考察

ヒガンバナは、ヒガンバナ科を代表する植物で、ヒガンバナ属に分類されている。秋の彼岸の頃に花が咲くので、この名前が付いた。別名の曼珠沙華は梵語の「天上界に咲く赤い花」を意味する。このことから仏教と結びつけられ、その伝来とともに中国からもたらされたとする説もある。日本では北海道と離島を除く本州・四国・九州・沖縄に分布している。中国では揚子江の上流に大群落があるほか、太平洋に面した地域に自生しているので潮の流れで九州などに流れついたものもあると思われる。地誌的に考えると元々、日本にも自生していた可能性が高い。中国のヒガンバナは2倍体のものもあり種子ができるが、日本のものは3倍体なので種子ができ

(次ページへ続く)

ず、球根が分かれて増えていく。

ヒガンバナには強い毒がある。学名のリコリスから名付けられたリコニンやセキサンなど9種類のアルカロイドを含み、その毒性はトリカブトの毒と双壁と言われている。アルカロイドとは、植物毒の総称である。

暦が曖昧だった古い時代は、ヒガンバナを墓地に植えて秋の彼岸を知った。時代が下がると、墓に多いので不吉な花として死人花や幽霊花、それに地獄の業火をイメージした火炎花のほか、球根をかじるとビリビリするので“舌まがり”など、その方言は100を超える。ところが、万葉集に詠まれたものは少なく「いちし」というのがヒガンバナではないかと考えられている。幕末のころ、アメリカから来た黒船が日本で長持ちする野菜を求めた。そのひとつにタマネギを見せられたが、当時の人はタマネギを知らなかった。それでヒガンバナの鱗茎(球根)を売りつけて叱られたという話がある。球根からは質のよいデンプンがとれ、水にさらしては干す。これを7回くり返せば毒が抜けるという。このほか食糧難の時代は、花茎を何度も水にさらして食べた記録が残っている。毒抜きが不十分であれば危険なことは言うまでもない。古い時代の切手のノリはヒガンバナのデンプンノリを使っていたそうで、切手をナメると下痢をおこしたという。そのため、私が小学生の頃、切手をナメてはいけなとよく言われた。守らずに切手を貼るのに、よくナメていたが何ともなかった。戦時中に風船爆弾が作られた。風船とは気球のことで、厚紙が貼られた。当時の米は貴重な食糧であり、米のデンプンノリは使わなかっただろうという人がいた。私はNHK 第一ラジオで、朝5時から始まる“毎朝ラジオ”を目覚ましに聞いている。このとき、当時をふり返って、風船爆弾を作るのに駆り出された女性が、ヒガンバナの球根から取ったデンプンノリを使ったと証言された。これには一気に目が覚めたものだ。

ヒガンバナは耐寒性が強く、花のあとで葉を茂らせ春になると葉を枯らせて夏眠に入る。競り合いを防ぐために、他の植物が冬枯れした空間を実にうまく利用している植物である。



芸術たらしめる文章

セレナード

(原曲作詞: ルートヴィヒ・レルシュタープ、訳詞: 堀内敬三)

秘めやかに 闇をぬう 我が調べ
静けさは 果てもなし 来よや君

ささやく木の間を もる月影 もる月影
ひとめもとどかじ たゆたいそ たゆたいそ

君聞^ねくや 音におせぶ夜の鳥
我が胸の秘め事を そは歌いつ

鳴^ねく音に込めつや 愛の悩み 愛の悩み
わりなき思いの かの一^{ひとふし}節 かの一節

深き思いをば君や知る わが心 さわけり
待てるわれに 出で来よ君 出で来よ

僕は学生時代、図書館で視聴覚係のアルバイトをしていた時から、Bob DylanとFranz Schubertが好きになった。Bob Dylanはなんといっても、その抑揚を強調した歌い方とサウンドが好きだ。その詩については、語るべきことは限りなくあるだろう。しかし僕はその歌声を含んだ音楽としてBob Dylanが好きだ。特に気に入った曲があって詩を読んでみると、たいいて裏切られることはなく、心打たれることが少なくない。特に「One Of Us Must Know (Sooner Or Later)」「I Want You」「All I Really Want To Do」「If Not For You」「Simple Twist Of Fate」のような愛の歌が好きだ。

Franz Schubertはピアノ・ソナタも好きだ。リストもシューマンもショパンも聞かないけれど、シューベルトはピアノ曲でも聞きたいと思うのは不思議なものである。セレナードは僕はずっとピアノとバイオリンの曲で聞いていたから、その原曲に付いている詩については知らなかった。ここで取り上げるに際して、「白鳥の歌」についている歌詞カードを読んでみると、これはこの音楽にぴったり合った美しい愛の歌である。訳詞は西野茂雄。

セレナーデは小夜曲あるいは夜曲。思いを寄せる女性の家の窓辺で夕べに歌い奏する

音楽、であるという。

しかし、美しい詩ではあるけれど、どうも意味がわからない。そうしているうちに会報の試作品が刷り上がってきた。いつの間にか、堀内敬三の訳詞に入れ替わっている。これはただ独語の詩を日本語に訳した詩ではなく、歌詞として訳したものであり、歌うための詩である。これを読んでやっと、この歌がシンプルな恋の歌であることがわかってきた。外国の詩というのは、その訳者によって、ずいぶん印象も、そして評価も変わってしまうのだと思う。

さとうきび畑（作詞・作曲：寺島尚彦）

1. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
今日もみわたすかざりに
緑の波がうねる
夏の陽ざしの中で

2. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
むかし海の向こうから
いくさがやってきた
夏の陽ざしの中で

3. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
あの日鉄の雨にうたれ
父は死んでいった
夏の陽ざしの中で

4. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
そして私の生まれた日に
いくさの終わりがきた
夏の陽ざしの中で

5. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
風の音にとぎれて消える
母の子守の唄
夏の陽ざしの中で

6. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
知らないはずの父の手に
だかれた夢を見た
夏の陽ざしの中で

7. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
父の声をさがしながら
たどる畑の道
夏の陽ざしの中で

8. ざわわ ざわわ ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
お父さんて呼んでみたい
お父さんどこにいるの
このまま緑の波に
おぼれてしまいう
夏の陽ざしの中で

9. ざわわ ざわわ ざわわ

けれどさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ
今日もみわたすかぎりに
緑の波がうねる
夏の陽ざしの中で

10. ざわわ ざわわ ざわわ
忘れられない悲しみが
ざわわ ざわわ ざわわ
波のように押し寄せる
風よ悲しみの歌を
海に返してほしい
夏の陽ざしの中で

11. ざわわ ざわわ ざわわ
風に涙は かわいても
ざわわ ざわわ ざわわ
この悲しみは 消えない

各章、1～4行目は沖縄の、何の変哲もない畑の風景を描いている。ところが5～6行目では、その平和な故郷に突然に持ち込まれた戦争、一瞬にして奪われた父親と、その後生まれた筆者、悲しみの中に、父を思うやきれない気持ちを歌っている。これは単に音楽として楽しめる歌ではなく、あまりにも切ない、悲しみの歌である。

君死にたまふことなかれ（與謝野晶子）

旅順口包圍軍の中に在る弟を歎きて

あいをとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ、
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも、

親は^{やいば}刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや。

さかひ

堺の街のあきびとの
きうか
舊家をほこるあるじにて
親の名を繼ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、すめらみこ
とは、戦ひに

おほみづからは出でまさね、
かたみに人の血を流し、
けもの
獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みころの深ければ
おほ
もとよりいかで思されむ。

あをとうとよ、戦ひに
君死にたまふことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守り、
やす
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

のれん
暖簾のかげに伏して泣く
にあづま
あえかにわかき新妻を、
君わするるや、思へるや、
とつき
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
あまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ。

7, 5, 7, 5, 7, 5、と韻をふんで、抑揚をつけて流れるように読みたくなるこの詩は、日露戦争において、ロシア帝国の旅順要塞を、日本軍が攻略し陥落させた旅順攻囲戦に出兵している弟を想う詩。

「間島パルチザンの歌」(槇村浩)

思い出はおれを故郷へ運ぶ
白頭の嶺を越え、^{からまつ}落葉松の林を越え
^{あし}蘆の根の黒く凍る沼のかなた
^{あか}赫ちやけた地肌^{くろ}に黝ずんだ小舎の続くところ
^{こうらい き じ}高麗雉子が谷に啼く^{かんきょう}咸鏡の村よ
雪溶けの小径を踏んで
チゲを負ひ、枯葉を集めに
姉と登った裏山^{なら}の檜林よ

(次ページへ続く)

山 番に追はれて石ころ道を駆け下りふたりの肩に
背 負^{しょい} 繩^{なわ}はいかにきびしく食い入ったか
ひばわれたふたりの足に
吹く風はいかに血^ちごりを凍らせたか

雲は南にちぎれ
熱風は田のくろに流れる
山から山に雨乞^こひに行く村びとの中に
父のかついた鋤^つ先を凝視めながら
眼^め 暈^まひのする空き腹をこらへて
姉と手をつないで越えて行った
あの長い坂路よ

(以下略)

間島パルチザンの歌は冒頭、朝鮮半島の美しい山村の風景をあたかも、歌を唄うように描いている。しかし続いて読んでいけばわかるように、この詩は三・一独立闘争[※]を語った詩である。戦争を記録した詩である。

※ 三・一独立闘争…1919年3月1日、ソウルで日本支配からの解放を望む朝鮮民族が起こした反日独立運動。孫秉熙^{ソン・ヘイ}ら33人がソウルで独立宣言を発し、朝鮮の独立を世界の世論に訴え、朝鮮独立万歳を叫ぶ示威運動は以後1年以上にわたって、国内外で断続的に展開された。全国218郡のうち212郡で直接蜂起^{ほうき}があった。日本の軍・警察は武力でこれを鎮圧した。万事件とも。日本統治下における最大の民族運動であった。

僕は歴史のことはよくわからない。しかし、この冒頭の部分の美しさは何だろう。それはこの詩を構成している言葉による。思い出、故郷、白頭の嶺、落葉松の林、凍る沼のかなた、赫茶けた地肌、小舎の続くところ、美しい言葉を紡いで、美しい文章が成り立っている。この詩も、流れる音楽のように読みたい詩である。

それでは、随筆はどうであろうか。月報第5号で取り上げた尾崎喜八の「東京植物同好会に於ける植物採集会の記」、この文章は昭和5年、尾崎喜八が記事を書き、同年10月1, 2, 3日発行の「報知新聞」に連載された。同じ文章が昭和10年に朋文堂より発行された尾崎喜八著『山の絵本』に「胴乱下げて」と題して収録される。さらに昭和22年、鎌倉書房より発行の牧野富太郎著『牧野植物随筆』にも所収。牧野はその間、昭和12年に朝日文化賞を、昭和10年に民間アカデミー国民学術協会より表彰を受け、昭和25年には日本学士院会員に就き、26年には第1回文化功労者、昭和32年に死去し、従三位勲二等旭日重光章を受け文化勲章を授与された。そのような数々の栄誉の陰に文学界

で著名な尾崎喜八のこの文章があったことを無視することはできないであろう。山を愛し、植物を愛し、文学を(?)愛すわたくしにとって、山の詩人、尾崎喜八がこのような名文を残してくれたことに対して、よくぞ、という思いである。それは一方で、牧野富太郎の指導する植物観察会の風景を描き、記録してくれた、他には残されていない重要な記録なのである。

…しかし僕の眼は始終先生に注がれる。「先生」。先生とは二十年このかた絶えてこの口を出なかった懐しい言葉である。人を先生と呼ぶためには、僕に弟子の心がなくてはならぬ。僕は文学の先輩をも先生と呼んだ事は一度もない。しかし今朝、僕は極めて自然に、喜びをもって、「熱情」をもってさこの言葉を発音する。牧野富太郎先生は、右左からの皆の挨拶に、にこにこしながら応えて居られる。

タスカンの一文字帽に、夏の灰色のサージの上着、ズボンは学生の穿く黒である。左の肩から緩やかに吊った、大きな新らしい薄緑の胴乱。純白な立カラアの折返しから覗いている老人らしい咽喉仏。僕は先生の強くて優しい眼を見る。日に焼けて矍鑠としたその顔を見る。力ある鼻翼を持った均勢の取れた鼻を見る。あのしっかり張った頤、あれは土佐の人の頤である。一瞬間僕の眼の前に、センダンの並木を風の渡る高知県佐川の町が現れる。そこの落着いた古い家並や、青山文庫の閲覧室や、仁淀川から立昇る夏の真昼の水煙に銀色に霞んだ緑の山々が見える。
(以下略)

この一文を読めば、おのずと芸術的な文章である、との印象をもつであろう。

大島亮吉の『山 研究と随想』の中では「荒船と神津牧場付近」がよく知られた名文であるが、随想の項の最初に収められた「石狩岳より石狩川に浴うて」もまた芸術的な文章という印象をもつものである。最後の部分では、未知の山域に挑もうとする筆者の期待感、意気込み、緊張感が伝わってくる。

唯だ板片を集めて組み立てた様な極めて粗造の小舎造りの浴舎の古新聞紙を張りつめた板壁で囲まれた室のうちで、自分は鈍いランプの火光の下にある自分の姿を見出した。そして大都会の華美な灯影とその雑然たる騒音とを遠ざかってから、この松山温泉にまでの遠く長かった道程のうちに走馬灯のごとく自分の眼に映ったさまざまの事象を想い返してみた——暑暑しかった車中。甲板から望んだ津軽海峡の碧い、おだやかな海面とそれを乱して跳ぶ海豚の姿。函館の明るく涼しい夜景と露西亜語の招牌。札幌の整然とした街衢の構成。旭川の祭の夜。貧しい美瑛忠別の開墾村の光景などが、順を追うて頭に浮んで来て、今更乍らずいぶん都会を

(次ページへ続く)

遠く離れて来たものだと思ひ感じられた。然し尚自分は此等のものから遠ざかって、ただ岩と雪と樹とのみの世界へ深く這入り込むのだ。この松山温泉は人事の世界の最後の地点なのである。

さて、そこで田部重治の詩を読んでみる。「ふるさとの山」「ふるさとの想ひ出」いずれも美しい言葉を綴ってふるさとの風景を表現している。いずれも5, 7, 5, 7, 5, 7と韻をふんでいる。「乙女の墓」これを読んで、月報43号で取り上げた「心の行方を追ふて」の「六月」で、二十に充たずして亡くなったのが田部の妹であることがわかる。この詩も5, 7・5, 7・5, 7・5, 7と読むと、なぜか、リズムを付けて読めるものである。

漢文調(文語体)の詩といえば「君死にたまふことなかれ」もそうである。漢文調で韻をふむ詩がとても美しい旋律で心に響くのはどうしてだろう。

ところで、僕が20歳の頃、阿佐ヶ谷の穂高書房に行って、店主の和久井さんに、この本はと聞くと、たいへん、「そんな本はやめといた方がいいよ」と言うのに、田部重治の本を取ると、その本の解説を始めるのであった。そんなこともあったし、田部重治は他の作家と比べて抜きん出て多くの山旅の本を出している。安価な本が多かったし、全部そろえておけば、ずいぶん楽しめるだろう、との思いであった。内容もありふれた紀行文との認識でしかなかった。初めて、田部の文章が他とは違う、と感じたのは、やはり「山に入る心」である。この文章は有名な作家にも書くことのできない、芸術性のある文章である。田部重治研究会の白坂氏と交流するうち、他にもそのような文章のあることがわかってきた。次回以降、「紀行・随筆」の編で取り上げられれば、と思います。

(阿部良司)

自然観察クラブ 会費納入のご案内

□座番号：ゆうちょ銀行店番 078 普通 0528847

☆年会費（個人または家族） 1,800 円
（会報不要または直接取りに来られる方） 600 円

※ 会報はインターネットでもご覧になれます。

☆会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、

プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

☆バックナンバーご希望の方、毎月2部以上送付希望の方は、阿部まで。

㊦ あとがき ㊧

ここ数年来の夏の猛暑をさらに上回る予報が出ていたものの、夏の前半は雨が多かったり、時々雷の日があったりして、さてこの夏は生き抜くことができるのか、との心配もどうやら空振りで終わりそうです。オリンピックも東京大会の成功につながる期待を持たせてくれた大会として終盤を迎えています。

8月11日が「山の日」に制定され、船村徹が提唱するなど、栃木県は「海なし県」として、その制定に貢献したとか。「やまはいいなあ～」の語呂合わせのために？お盆前のハンパな日に、この暑い季節に、「山の日」はないと思うのですが。

山の名著の1冊に志賀重昂の『日本風景論』があります。明治27年発行の初版はたちまち売り尽くし、15版まで出て明治中期の大ベストセラーとなります。内容は日本の風土、風景などを論じた地学書。目次に見られる、気候、海流、火山岩、水蒸気、のような何の変哲もない言葉、しかしそのような言葉はそれ以前の日本ではほとんど知られていない言葉でした。この本が「山の名著」として挙げられるのは、地学書として国内の山岳について論じられているから、というだけではありません。

彼は政論誌「日本人」に論陣を張る国粋主義者でした。『日本風景論』は日本の国土、風土を論ずる中に、世界無比の自然美と叫ぶ、志賀の愛国の情があふれていました。この本が日本における近代登山の黎明を告げる書、と言われるのは、この本の中で付録としてつけ加えられた「登山の気風を興作すべし。」という1章によるのです。即ち日本風景論は日本で初めての山岳書であり、日本で初めて「登山のすすめ」を説いた本なのです。

「山の日」の制定に際し、志賀重昂の『日本風景論』が新聞紙上でも全く語られないのは残念至極。ここではその冒頭だけでも紹介したいと思います。（阿部良司）

㊦ おしらせ ㊧

自然観察クラブ 2016 年度 会員名簿

石川 さやか☆

石崎 隆史・裕子

稲葉 幸枝☆

大貫 辰郎・とし子

小川 真司・恵美

小島 美穂

櫻井 節子

佐々木 茂・理恵

塩入 宏之・佳子

白坂 正治

(一) 登山の氣風を興作すべし

樓に登りて下瞰す、なほかつ街上来往の人を藐視するの概あり、東京
愛宕山に登りて四望す、なほかつ広遠の氣象胸中より勃發するを覚ゆ、何ぞい
はんや嵯峨天に挿むの高山に登るをや。山に彩色の絢煥あり、雲の美、雲の
奇、雲の大あり。水の美、水の奇あり、花木の豪健磊落なるあり。万象の変幻
や、此の如く山を得て大造し、山を待ちて映發するのみならず、その最絶頂に登
りて下瞰せば、雲煙脚底に起り、その下より平面世界の形勢は君に向ひて長揖
し来り、悉くこれを掌上に弄し得、君是に到りて人間の物にあらず、宛然天上に
あるが如く、若くは地球以外の惑星よりこの惑星を眺観するに似、真個に胸宇を
宏恢し意気を高邁ならしめん、加ふるに山の組織の壮絶なるを頓悟し、山の形
体の完美なるを太覺し、坐ろに太氣の清新洗ふが如き処に長嘯し、兼て四面
の闐然寂靜なる裡に潜思默想せば、君が頭腦は神となり聖となり、自ら靈慧の
煥發するを知る。いはんや山に登るいよいよ高ければ、いよいよ困難に、ますま
す登れば、ますます危険に、いよいよますます万象の変幻に逢遭して、いよいよ
ますます快樂の度を加倍す。これを要するに、山は自然界の最も興味ある者、
最も豪健なる者、最も高潔なる者、最も神聖なる者、登山の氣風興作せざるべ
からず、大に興作せざるべからず。

学校教員たる者、学生生徒の間に登山の氣風を大に興作すること
に力めざるべからず、その学生生徒に作文の品題を課する多く登山
の記事を以てせんことを要す。

志賀重昂『日本風景論』(近藤信行校訂・岩波文庫版)より

(ほぼ五十音順、主に今年度会費をお納めいただいている方々です)

西澤 美智子☆

西山 義信・弓子

福田 淳・キヨ☆

福田 宜男・明子☆

山口 龍治

若林 滋子

渡邊 真知子

阿部 良司・みゆき

(☆印は今年度新入会員、

よろしく!)

『月報第44号』まさに“未知の高なり”を覚えつつ拝読させて頂きました
 「文芸の理念」に関する話題を2つ。①後年(昭和30年代)田部先生が講義テキストとして指定した際、門下生のお一人は仲間の分も含め古書店巡りをして集めたのを記憶している。②藤村研究者の教え子(時期的に国文の講義「文学概論」を受講したと思われる)は自らの著書の“文学概論”に先生の文学概論及び例文に和歌を挙げている。①はよき時代の師弟の絆の程が窺え、②も寺門歌人でない田部の和歌に歌人を超越した意味、意義を見出しているのは特筆されるべきことでしょう。

“愛書家のひとりごと”この圧倒的な筆のキレ、冴えでの“田部重治論”いつの日か『鶴』への御寄稿御待ちしております。

2016. 7. 27

白坂正治氏からのお礼状、加えて「月報第44号」にまたも編集部ミスによる誤字の訂正お願いします。申しわけありません。

17 頁 2 行目 …山室静が編集同人となり…→…山室静が編集同人となり…

19 頁 12 行目 冠松治郎→冠松二郎

鹿沼の自然・栃木の旅 月報第45号

2016年8月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

検索